

ミヒヤエル・エンデ『はてしない物語』における 夢とファンタジーのはたらき—本当の願いに気づくために

10K029 増田 誠子

はじめに

ミヒヤエル・エンデの作品『はてしない物語』は、主人公バスチアンが本を読んでいるうちにファンタジーエン国に入り込み、そこで様々な体験をして自分の本当の願いを見つけ、成長して人間の世界へと帰ってくるという物語である。そこで、このレポートでは、物語における夢とファンタジーのはたらきと、エンデ自身が考える夢とファンタジーについてまとめてみようと思う。そこから、バスチアンが成長するための体験をする場所がなぜ人間の世界ではなく、ファンタジーエン国だったのかについても、最後にまとめてみたい。

1. 定義

まず、「夢」と「ファンタジー」がどう定義されているか、みてみよう。

夢の意味は四つあり、一つ目が「睡眠中に持つ幻覚。ふつう目覚めた後に意識される、多く視覚的な性質を帯びるが、聴覚・味覚・運動感覚に関係するものもある。精神分析では、抑圧されていた願望を充足させる働きを持つとする」とされている。二つ目は「はかない、頼みがたいもののため、夢幻」である。三つ目が、「空想的な願望、心のまよひ、迷夢」で、四つ目が、「将来したい願い、理想」である。⁽¹⁾

ファンタジーには3つの意味があり、一つ目は「空想・幻想・白日夢（白昼夢）」、二つ目は「幻想的な小説・童話」で、三つ目は「幻想曲」とされている。⁽²⁾

では、空想・幻想とは何か。空想とは、「現実にはあり得るはずのないことをいろいろと思いつぐこと。想像の一種で、観念または心像としてあらわれる精神活動またはその所産をいう。願望充足の機能を持つことがある」と定義されている。一方、幻想は「現実にはないことをあるように感ずる想念。とりとめもない心像」である。⁽³⁾

2. 物語のなかでの夢とファンタジー

まずは、夢について考えてみよう。『はてしない物語』では、バスチアンがファンタジーエン国へ行くための媒介として使用されている。11章「女王幼ごころの君」でアトレーユは、女帝との謁見を終える頃、長い冒険の旅の疲れに襲われて眠りに誘われている。アトレーユに自己同一化してきたバスチアンもまた、この時（時刻は夜の11時である）眠ったと考えられる。それ以降、バスチアンは眠りの中で文字通り夢を見ていると理解できる。12章「さすらい山の古老」で古老が『はてしない物語』を最初から繰り返す時、その始まりは「ハウレの森」ではなく、バスチアンがいじめられっ子に追いかけて古本屋に飛び込む所からであることも、説明がつく。12章以降の、作品の後半部を構成するバスチアン自身の冒険は、つまり、眠ったバスチアンの夢の中で起こっていると考えられる。

そのファンタジーエン国でバスチアンは持ち前の物語を作る才能、いわゆる想像力を働かせてファンタジーエン国の物語を創り出していくのだが、筋を進めるためにはバスチアンの望みが必要となる。いろいろな望みを叶えていくことで、最後には真の意味、つまり自分の本当の願いを見つけることができる。これは、上記の「夢」の持つ意味の一つ目に関係している。

では、ファンタジーはどうか。人間のいる世界とは全く違う生き物たちがいるファンタジーエン国の話は、ファンタジーの一つ目の意味の「空想・幻想」である。バスチアンは豊かな想像力を使って、ファン

タージエン国で多くの話を生み出していき、さまざまな生き物も生み出している。

二つ目の「幻想的な小説・童話」は、『はてしない物語』の小説としてのジャンルを指すものである。

3. エンデの夢とファンタジー

まずは夢からみてみよう。

エンデは、夢とはオカルティズムでいう、アストラル体⁽⁴⁾の体験と考えている。感情や深層意識を司る非感覚的な実体で、幽体離脱や臨死体験の原因と言われているアストラル体が、肉体を離れるために夢を見るという考えである。⁽⁵⁾

また、エンデ自身が見る夢は、いつもとてもシュールリアリスティックで、いつもファンタスティックで、いつもどこか隠喩を含んでいるようなものだったようである。⁽⁶⁾ 夢の中にはいつも現実には決して出会わないような、おかしなものたちが登場するとのことである。⁽⁷⁾ 子供のころには、天地創造の壮大な夢を見たこともあり、何日も感激して、興奮から覚めず、とても怖いと思ったこともあったという。⁽⁸⁾ バスチアンのファンタジーエン国での体験が始まるときの様子は、エンデのこの体験から生まれたのかもしれない。

では、ファンタジーはどうだろうか。エンデが理解する「想像力」「ファンタジー」とは、読者が物語を読んで、いろいろと空想をふくらませる次元だけではなく、もっと、それよりも根源的な次元を指しているとする。⁽⁹⁾

エンデが「想像力」をどのように理解していたのか、その背景にはR・シュタイナーの『自由の哲学』の「道徳的想像力」があると言われている。⁽¹⁰⁾ それは、自由な人間とは周りの影響だけをもとに行動するのではなく、その行動をその人自身の中から自発的に欲する人だ、という考えである。シュタイナーはここで、想像力は根源的には、人の中にある「自発的に欲する」箇所に通じていることを示唆しており、想像力とはそのような「ねがいや望み」が生まれ出るところへ通じているという。「ねがいや望み」とは、その人の行動やあり方を生むのだから、とどのつまり、そのような想像力とはその人そのものの根源（心のなかの一番の深み）への道と言えるだろう。そこにはイデー（アイデア）という、時を超えた、向こう側からのものが宿る。つまり、人ひとりの根源への道は、人1人を超えた、もっと大きな広がりに通じている。そのような次元での想像力が、エンデの考えるファンタジーだと言える。⁽¹¹⁾

ここでエンデの執筆の際のプロセスを少しみてみよう。エンデは作品を執筆する際、現代を生きる人間として、当節の社会や人間の現象を、彼がもっとも注目することとして作品の題材にする。⁽¹²⁾ 社会と人間に関する外世界の問題は、内世界がむしばまれてきたこと、つまり心の荒廃と根源を一つにしている、心が荒れ果てている限り、外世界の問題も、真に解決することはない、とエンデは言う。さらに、心が荒れ果て、むしばまれてきたのは、わたしたちが心の世界があることを忘れてしまったからではないか、と問いかけている。⁽¹³⁾ それは、今回取り上げた『はてしない物語』でも同じである。虚無によって滅亡の危機にあるファンタジーエン国は、子どもの想像力を摘み取るような学校教育への批判、利益追求のため効率一辺倒の社会的価値観に対する批判につながる。そして、読書を通じて、想像力をたくましくすることの大切さを訴えているのである。

4. 物語の夢とファンタジーのはたらき

バスチアンは夢の中でファンタジーエン国へ行き、現実では叶わぬあらゆる望みを叶え、間違いを犯しながら、自分の本当の願いを知る。つまり、ファンタジーエン国の様々な住民たちと関わり、様々な体験を重ね、自らの根源へと下りていき、ようやく本当の願いを見つけられたことになる。「1. 定義」でみた、「夢」と「ファンタジー」（空想）の定義のように、学校の屋根裏部屋で読んでいた『はてしない物語』の感動に影響されて見た夢は、バスチアンの「抑圧されていた願望を充足させる働きを持つ」だったので、彼は自分の本当の願いを見つけることができるのである。

この物語での夢とファンタジーは、大好きな母親を失ってからのバスチアンと父親との冷めきった関係

に働きかけている。すなわち、ゴールは「誰かを愛することができるようになりたい」という願望に気づくことだった。それにより、心の成長を遂げたバスチアンは、外見や頭脳・身体能力などの誰もが目に見えるようなコンプレックスも克服できるだろうという見通しをもって、物語は終わる。

おわりに

なぜバスチアンが成長するための体験をする場所は人間の世界（現実）ではなく、ファンタジーエン国なのだろうか。このことを考えることで、まとめて代えたい。

バスチアンの現実世界を見てみると、学校では生徒のみんなからいじめられ、先生からも冷たく扱われていた。父親も、妻の死の悲しみから立ち直れず、息子のバスチアンには全く無関心になっていた。また、バスチアンの考えた話を聞くのが好きで、バスチアンを慕っていたクリスタも、寄宿学校に入ってしまったために、会えなくなってしまう。一言で言えば、愛情や優しさとは無縁の孤独で救いようのない現実である。こうした抑圧的な日常の中で、バスチアンにはどう生きていったらいいのか、その方向は見いだせない。

バスチアンの想像力で創り出されたファンタジーエン国では、したがって抑圧から解放されるために、まず「外見が美しくなりたい」、「運動能力が良くなりたい」など自己嫌悪の原因を除去する願望が充たされる。しかし、願望はやがて皆から恐れられる者、世界で一番の賢者、さらには幼心の君に代わるファンタジーエン国の帝王になるという野望へと膨らんでゆく。現実では決して叶うことのない、人間であれば望みたいと思うすべての願望を体験することで、バスチアンは自分の深層意識へ下りていき、自分の根源的望みに向かい合う。

ファンタジーエン国には、バスチアンがどんな態度を取ろうとも、決してバスチアンを見捨てない理想の友であるアトレユがいる。バスチアンが求めて止まなかった、愛されたいという願望をアイウオーラおばさまは充たしてくれる。おばさまは、バスチアンが本当の望みを見つける直前に、だれか別の人になろうとするのではなく、自分自身を変える大切さを説く。ファンタジーエン国は、想像力によって創り出される、人の心の中に存在する世界といえよう。もちろん古本屋のコレアンダー氏が言うように、誰もがこの想像力を持ち合わせているわけではないのだが。

エンデは、人間の現実世界に対峙するファンタジーエン国、言い換えれば「夢」や「想像力」の中に、現代社会が抱える問題を解決する力を見いだしていると考えられる。

註

- (1) 電子辞書「広辞苑第六版」岩波書店、「夢」検索。
- (2) 同上、「ファンタジー」検索。
- (3) 同上、「空想」、「幻想」検索。
- (4) <http://d.hatena.ne.jp/keyword/> 「はてなキーワード」アストラル体、検索（2012年2月3日取得）
- (5) ミヒャエル・エンデ（田村都志夫訳）『ものがたりの余白 エンデが最後に話したこと』岩波書店、2000年、245頁。
- (6) 同上、243頁。
- (7) 同上、243頁。
- (8) 同上、244～245頁。
- (9) 田村都志夫『エンデを旅するー希望としての言葉の宇宙』岩波書店、2004年、35頁。
- (10) 同上、35～36頁。
- (11) 同上、37～38頁。
- (12) エンデ、前掲書、175頁。
- (13) 同上、175～176頁。

（担当教員 桑原ヒサ子）